

男子大学生の期待する女性像

—男女の関係性を捉えるジェンダー研究に向けて—

大道真佐美(お茶の水女子大学大学院)

1. 問題の所在

これまで「ジェンダーと教育」に関する研究の多くは、主に女性を研究対象として取り扱ってきた。これらの研究は、特に、教育達成や職業達成において、男女間や女性内でも偏りがあることや、それぞれの達成過程において女性は様々な不平等を被っていることなどを、構造レベルやマイクロレベルなどについて多面的に明らかにしてきた(木村 1990、中西 1993など)。これらの研究は、男女間の差異や女性内分化に注目し、社会化過程のあり方を検討するなど、男女平等に向けて戦略的な意義を持ってきたと言える。

しかし、一度形成された女性の意識や存在が、その後、固定的に維持されていくというわけではないだろう。社会の中ではさまざまなジェンダーメッセージが発せられており、人々の意識や存在を、常に流動的で可変的なものとして捉えることもできる。このような立場からは、就職活動中の女子学生が男性社会と直面する中で、職業意識を変えていくことを明らかにした研究(吉原 1995)などが挙げられる。同様のことは、男性についても見出される。多賀(1996)は、様々な出来事、特に恋愛を通じて変化する男性のアイデンティティ形成過程を見出している。両者の研究は、男女の価値観が何らかの影響を与え合っていることを明らかにしており、男女双方によって作りだされる現象を考察するジェンダー研究の必要性を示唆するものである。また、男女を視野に入れた研究の方向性は、男女平等達成に対しても、より実践的な意義を持つものになるだろう。

しかし、これまでの「ジェンダーと教育」研究では、男性の意識や状況を把握したものは少なく、そのため男女の意識の布置関係を同一の分析枠組みから探る視点も薄かったと言える。近年、男性学の発展によって、男性も研究対象として焦点化され始めている(伊藤 1993など)。しかし、まだ女性ほど綿密な調査分析は行われておらず、また男女を視野に入れた考察も十分ではない。

そこで本研究は、男性を主な対象とした数量的な調査分析を行いつつ、同一の枠組みから男女の意識の布置を検討し、男女間でどのような現象が生じていくのかについて考察する。具体的には、①男子の性別役割意識や、それに関わる要因を明らかにすること、②これまで力点のおかれてきた女性のライフコース展望に関して、男女双方の価値観の布置およびそこに見られる男性の期待する女性像を明らかにする。

2. 実証研究の対象と方法

調査時期 1997年9～10月

調査方法 質問紙調査(集合、留置、郵送法を併用)

調査対象者 首都圏の4年制大学に在籍する、男子大学生278名、女子大学生307名の計585名。有効回収率62.5%。

本調査は、1997年度東京女性財団の自主研究助成費を受けて実施したものである。なお本研究では男子を中心に分析する。大会当日、詳しいデータを配布する。

3. 分析結果

3-1. 男性の意識とその規定要因

「ジェンダーと教育」研究では、女性の就業意識やライフコース展望と出身階層との関連の分析が非常に多く蓄積されており、娘の就業志向には母親の存在、特に母親の就業形態が大きな規定要因であることが明らかである(岩永 1990、中西 1993など)。

一方本研究では、男子大学生の性別役割意識と出身階層の関連について、つぎのような特徴が見出された。まず、「家庭を持ったら仕事を辞めることはできない」という男性に主に課せられる経済的な役割意識を問う質問項目について、父職が専門・管理職、事務・販売職の学生はこれに肯定的に答える者が多いが、父職が自営業、農林・漁業などの学生は否定的に答えていた。また、「子

どもは保育園などには預けず家族で育てたい」といった女性に母役割を期待する意識は、母親の就業形態によって異なっていた。就業継続している母親を持つ学生は、反対する者が多いのに対し、中断再就職や専業主婦の母親を持つ学生は、賛成する者が多かった。

3-2. 理想の女性像に関する男女の意識の布置と男性の期待する女性像

本研究では、筆者独自に設定した9つの女性モデル(働く女性や主婦に関するモデルなど)を、20点満点で評価させ、その得点を個人内で標準化することによって、1人が望ましいと思っている理想の女性像の全体的な様相を把握することを行った。ここではまず、理想の女性像に関する男女の意識の布置を明らかにするために、男女全体でクラスター分析を行った。クラスターを3つに設定した結果、3グループの構成人数は男女間で異なっていた。また男子について詳しく見ると、各グループごとに以下のような理想の女性像を志向していることが見いだされた。

<グループ1>

男子全体の約2割によって構成されている。このグループは、専業主婦モデルだけを理想とはせず、働く女性モデル(「家庭を持って大企業で働く」「家庭を持って美容師をする」)も同列に高く評価しており、女性の生き方に対して柔軟な姿勢を持っていると特徴づけられた。

<グループ2>

男子全体の約2割によって構成されている。このグループは、既婚や未婚に関わらず、働く女性モデル(「独身で弁護士をする」「家庭を持って大企業で働く」など)を高く評価し、女性の経済的自立を肯定的に見ている。しかし自分自身の結婚には消極的であったことなどから、女性との関係の取り方には、今のところあまり関心がないと特徴づけられた。

<グループ3>

男子全体の約6割と最も多くの者によって構成されている。このグループは、主婦モデル(「専業主婦で資格取得」「専業主婦でボランティア」)を理想の女性像として高く評価しており、比較的女性に対して保守的な姿勢を持っていると特徴づけられた。

4. 考察

以上のことから、男性の性別役割意識の一部分については、両親が共に重要な役割モデルを果

たしていることが明らかになった。男子の経済的役割意識が父職に規定されている点は、父親が同性の役割モデルとして大きな影響を与えていることを示しているといえる。一方、女子学生の性別役割意識やライフコース展望については、本調査でも母親の就業形態が最も大きな規定要因であった。男女とも、母親の就業形態が女性への役割期待や役割意識に大きく関わっていることから、男性についても女性同様、母親との関係について更なる調査が必要である。

次に、男子大学生の約6割が「保守的な女性像」を志向するのに対して、これを志向する女性は約4割、また他の女性の約4割は「柔軟な女性像」を志向しているなど、男女間で理想とする女性像の分布に違いが見出された。大学生同士の関わりの中では、女性は保守的な考え方を持つ男性と接触する可能性が高く、一方男性は様々なタイプの女性と接触する可能性が高いことが予想される。こうした男女間の価値観の違いが、現在進行している未婚化や晩婚化を進めていくのか、多賀(1996)の言うようにアイデンティティの変容をもたらしていくのかについては、今後インタビューなど質的な調査が必要である。

【参考文献】

- 伊藤公雄 1993『<男らしさ>のゆくえ 男性の文化社会学』新曜社
- 岩永雅也 1990「アスピレーションとその実現—母が娘に伝えるもの—」『日本の階層構造④』東京大学出版会 91-118.
- 木村涼子 1990「ジェンダーと学校文化」長尾彰夫・池田寛編『学校文化—深層へのパースペクティブ—』東信堂 147-170.
- 牧野カツコ 1989「母親の就労と家族関係」『教育社会学研究』40,50-70.
- 中西祐子 1993「ジェンダー・トラッカー—性役割観に基づく進路分化メカニズムに関する考察—」『教育社会学研究』53,131-154.
- 多賀太 1996「青年期男性性形成に関する一考察—アイデンティティ危機を体験した大学生の事例から—」『教育社会学研究』58,47-64.
- 田中和子ほか 1989「大学生の両性意識をめぐって—性別役割分業を支えるメカニズムを探る—」『解放社会学研究』3 70-87.
- 吉原恵子 1995「女子大学生における職業選択のメカニズム—女性内分化の要因としての女性性—」『教育社会学研究』57,107-124.